

## 手づくり郷土賞<sup>ふるさと</sup> 選定委員会

### 全体講評

手づくり郷土賞は、昭和61年度に創設以来、今年度で29回目を迎えております。今年度も、全国各地から、数多くの優れた取組の応募がありました。各々の地域を良くしていこうという想いが伝わってきて、甲乙付けがたいものばかりでした。

地域活動を通じ、かつての賑わいをとりもどしたものの、河川等における美化活動や緑化活動による自然再生したものが多く見受けられました。その一方で、一つの地域に収まらず、複数の地域で連携して地域興しをするもの、伝統芸能を守る場として社会資本を利活用しているもの等もありました。

現在、本格的な人口減少社会が到来し、自然、社会、文化等の面で多様性に富んだ我が国の国土を構成する各地域が、それぞれの個性と価値を改めて自覚し、これを深めていくことによって、人々が地域への誇りと愛着を強めていけるようにすることが必要であります。手づくり郷土賞を受賞した団体および地域は、まさにこれを体現しているのではないのでしょうか。

今後も、受賞された団体および地域においては、活動の継続および更なる発展にご尽力いただくとともに、本賞の選定事例を全国に広めていくことによって、各々特徴ある地域づくりが進んでいくことを、選定委員会一同期待します。

## 選定委員講評

### 齋藤 潮 委員長

地元で頑張っている人たちとその活動にエールを贈るのがこの表彰制度の趣旨だと認識しています。しかしながら、応募いただいたらもれなく表彰するのではなく、その中から一部を選定することになると、これはなかなか難しい。選定の目安は「選考のポイント」として明示されているものの、これらが活動の真価を言い当てるに十分かと問われれば、”いわく言い難し”なのです。

NHK 総合テレビに「キッチンが走る!」という番組があります。プロの料理人が日本各地を訪れ、地元の生産者に会って食材の提供を受ける。食材提供者はその土地の気候風土と相談しながらそれぞれ誇りをもって作物を育て、あるいは漁をしてきた人たちです。料理人は食材を吟味し、組み合わせを工夫し、常識にこだわらない新しい料理を考案する。クライマックスは食材提供者を招いての会食です。自分達の食材にこんな調理法があるなんて考えてもみなかったと驚きつつも、満面の笑顔で新しき味に舌鼓をうつ人々。これまで頑張ってきてよかった、と口々に語ります。

この喜びとはなんだろう。この喜びにはいろいろな意味が込められている。選定にあたって委員諸氏と議論しながら、ここに「手づくり」と「郷土」にかかわる大事な何かがありそうだと、頭の中で考えていました。委員諸氏とともにずいぶん悩んだと申し上げて、受賞なさった皆様をあらためて言祝ぎたいと存じます。

### 荻原 礼子 委員

このところ、今までは地味な扱いであった地方のまちおこしの取り組みが、活力や夢を感じさせる話題として注目されるようになってきたように思う。たとえば何も無い田舎と思われていた町で、地域の心ある人たちが大事な場所の保全に取り組

む。少しずつ賛同者が増え、皆で知恵を出し合っ  
てその場所の魅力を活かしたイベントなどでまち  
の活性化につなげる、というような人のつながり  
と地域再生の物語りに時代の目が向いている。

そして今回の手作り郷土賞にノミネートされた  
活動のどれからも、そのような熱いドラマが感じ  
られた。特に大賞を受賞した活動は、多くの方が  
相当なエネルギーを長年持続させ、様々な人や組  
織が力を合わせて、奇跡のような成果をあげた事  
例であると思う。

そして、これらの事例には、実にさまざまな地  
域づくりの知恵がつまっていると思う。協力者を  
集めるための知恵、魅力的なイベントの知恵、官  
民が力を合わせるための知恵などなど。

手作り郷土賞を通して、このような知恵が全国  
にお裾分けされていくとよいと思う。未来につな  
がるお裾分けの輪が広がるとよい。

### 佐々木 葉 委員

あらためて、郷土一ふるさと、とは何だろうか。  
自らが住み、暮らす地域に対して愛着や帰属意識  
をもったとき、「地域」は「ふるさと」になるの  
であろう。それは必ずしも出身地である必要はな  
い。さらには、そこを旅人として訪れた人にさえ  
も、「ふるさと」という感覚をいだかせてくれるこ  
と。それが現代に必要な地域づくり、社会資本整  
備ではなからうか。それは単に、花が美しい、水  
辺が気持ちよい、という眺めの問題だけでなく、  
そこで活動する人々のしっかりとした暮らしの自  
立とたくましさを支えられた自治力に関わる。今  
年受賞された方々にはそういった自治の力を礎に、  
現代の様々な社会問題へのブレークスルーを見い  
だそうとしているように思われた。地域に根ざし  
ながらも広く外の世界に開かれた活動に特にその  
可能性を感じる事ができた。必然的にネットワ

ークの一部として存在する水辺および生き物に関わる活動。あるモノから始まり、それを支える材料や人に展開する活動。子どもや若年層の自立を支援する活動。活動自体が自己目的化するのではなく、活動を通じて徐々に形成されていく自治力。それこそが真のふるさとを輝かせるものと期待する。

#### 鈴木 伸治 委員

今年度より選考に参加し、改めて全国で地域の自然、歴史、文化を活かした多様な取り組みがなされていることを認識いたしました。選考にあたり、個人的には質の高い活動をいかに持続的に行っているのかという点を中心に評価しました。受賞例のみならず、選にもれた活動においても、年間百を越える会合やイベントを何年間も続けているような団体が幾つもありました。私自身もまちづくりの活動に参加しており、その経験から見ると、こうした活動を維持しているエネルギーは驚異的であり、取り組まれる方々の情熱には改めて敬意を表したいと思います。また、こうした活動を維持するためには資金の獲得も重要であり、税金に頼らず、様々な工夫により、活動を維持している例には感心させられました。社会資本の維持管理に関するような活動では、その活動が管理者や税金によって支えられているようなケースも見られます。しかし、今後の社会状況を念頭におけば、住民中心のボランティアによる活動だけでなく、企業や団体など多様な担い手が様々なアイデアを持ち寄って自立的に、持続的に活動するケースも増えてくるのではないかと思います。応募者の皆様の今後の活動の一層の発展を祈っております。

#### 関 幸子 委員

地域再生、地方創生の重要性が認識されていま

すが、手づくり郷土賞に応募された地域の取り組みこそが、地方創生に繋がっていくと感じました。受賞された地域だけでなく応募された全ての取り組みは、住民が自らの目線で、地域の資源を活かしてより一層魅力ある郷土にしようとする主体的なものであり、地域の課題を解決するまちづくりそのものだからです。例えば、花の植樹や河川の清掃、湖の再生、里山の保全等の景観・環境整備そして高校生のレストラン運営、地元食材による学校給食等、事業は多種多様であり、同時に数十年にわたる活動で大きな流れになったものばかりです。

手づくり郷土賞の存在は、応募や受賞によって、地域に気づき、地域の個性が育かれ、地域での多様な連携や協働事業が進むという効果にあります。賞は、小さな蕾が大きく花開くように、人々が一緒になって汗を流すきっかけをつくることになっていると言えるでしょう。

今回の選定作業の中で、人口減少と高齢化が進む中で、暮らしを豊かにし、心を耕し笑顔を作り出すためには、足元の小さな活動の大切を改めて認識しました。最後に、受賞されました地域のご活躍と発展を祈念致します。受賞おめでとうございます。

#### 田中 里沙 委員

受賞者の皆様、誠におめでとうございます。今年も多数の応募をいただき、各地域の熱意あふれる活動から、大きな刺激を受けました。活動内容は、歴史、規模、時間軸などが多様で、審査員の間ではその基軸に関して意見が分かれ、時には白熱した議論が広がる審査会となりました。私自身、すべての地域の現場をよく知るわけではなく、資料や現地視察を得た方々からのお声から判断するところもありましたが、かかわる方々が力をあわせてアイデアを出し合い、楽しく、地道に、着実にその輪を広げながら継続している点に敬意を表したいと思います。強い目的意識から生まれた企

画もあれば、少しでも地元のためになればという小さな気持ちから始まった企画もあるようです。日本には各地に素晴らしい資源(=社会資本)が存在し、地域の人々のきめ細やかな感性によって磨きがかかっています。手づくり郷土賞に接し、イベントやワークショップに参加をした人は、地域に一層の愛着を持ち、また次世代も確実に育てているのだと感じます。水辺空間、海道、竹林、里山、港湾、路面電車など、社会資本を活かした郷土づくりは、魅力的な観光資源にもなり、益々の注目を集めるであろうと期待します。

### 森反 章夫 委員

地域住民の創意工夫が漲る活動によって、道路、河川/河川敷などの社会資本の均質な表情に地域独特の味わい・色合いが与えられる。さらには、地域住民の活動の場所という新たな社会資本の社会的機能、役割が明確になる。その結果、社会資本の均質な空間がまさにその「土地に固有の場所」へと緩やかに変換していく。この変換における固有の場所性の強度を創り出すのは、地域住民の営みであり、それを支援する地方の担当行政の度量であると思われる。公民協働の形とその帰結として、道路・河川・河川敷などの「公有地の地域による領有化」が「手づくり郷土賞」の大切なコンセプトであると再認識させられた。

心に残る案件がある。例えば、「中山間地域の持続可能な地域づくりのモデル」として応募された福島県昭和村の「からむし織」伝承技術である。この無形文化財の保護活動と「道の駅」との連携がどのように深まっていくのかが問われている。中山間地域の活性化は重要な国土形成のテーマである。原材料を持続的に栽培するための環境の維持と「社会関係資本」として織物技術の伝承の仕組みなど、今後の適確な取り組みとその持続に期待したい。